

小枝義人の世相一刀両断

第1号（2018年9月16日） 一般財団法人自由アジア協会

親友・蘇啓誠さんの死に想う

「さぞご心労多かったと推察」

今年の元旦も年賀状が届いた。印刷文の脇に手書きで「御学は渦中の大学で、さぞご心労多かったと推察します」とあった。筆者の奉職する大学が加計学園グループであり、それを心配してくれたのであろう。差出人は台北駐日経済文化代表処那覇分処長の蘇啓誠さん。9月14日、その彼が急逝した。しかも、自殺と聞いて、一瞬、耳を疑った。7月に那覇分処長から大阪分処長に赴任したばかりで、転勤が落ち着くこの秋には、一度彼を訪ねようと思っていた矢先の悲報であった。

年賀状で筆者を慮った「心労」が9ヵ月後、彼を死に追い込んだ。聞けば、今月初めに関西地方を襲った台風21号による被害で、関西空港が機能不全となり、取り残された台湾人旅行者への対応が不十分だとの批判が台湾の大阪分処に殺到し、その責任者である蘇さんは憔悴の日々だったという。

関空は滑走路や建物が水没し、空港と対岸を結ぶ連絡橋にタンカーが激突して孤立し、日本政府でさえ、救済に手間取ったほどだ。一領事館レベルで出来ることなど限られている。それでも死の前日まで律儀に公務をこなしてい

たというから、彼の誠実さが偲ばれる。

「台湾にアドバイスを」

初めて蘇さんにお会いしたのは、今から20数年前のことだったと記憶している。東京にある台北駐日経済文化代表処のベテラン・朱文清さんを訪ねると、「今度赴任してきた外交部の蘇さんです」と紹介され、3人でランチを囲んで、和やかな会話が弾んだ。年齢を聞くと私より3つ下、弟と同じ歳だ。人懐っこい表情が印象的で、一生懸命に日本を理解し、日本人と仲良くしようとする真摯さが好きで、よく連絡を取り合っただけで会う仲だった。

何かの拍子に、今は外務大臣として活躍している河野太郎衆議院議員がまだ当選1回の新人だった際、「ぜひお会いしたい」と言い出した。河野議員の快諾を得て、中華料理店で会食をした際、「河野議員、何か台湾にアドバイスをいただけませんか」と蘇さんが尋ねると、河野議員は即座に「これからは近隣諸国には都心から遠い成田ではなく、羽田ー北京、羽田ー金浦空港などに、頻繁にチャトル便が飛び交う時代になります。台湾も中心部から離れた桃園ではなく、羽田と台北市内の松山空港便

を早く開通させることです」と答えたことを覚えている。実際、数年後、それは実現し、日台関係の緊密化に多大な貢献をしている。

2001年1月、蘇さんが本国に戻るのと入れ違いに、李登輝元総統が心臓病治療のため、日本を訪問した。その秋、李元総統の日本訪問について、台北市郊外の別荘でのインタビューが実現した際、同行してくれたのが、台湾に戻った蘇さんだった。

こちらは彼の顔を見て、安心したが、訪問団一行は夕食を挟んで、5時間ほど別荘に長居をした。仕事とは言え、キャリア官僚の彼が、鞆を抱えたまま、じっと控室に待機し、私たちを待っていてくれたのだ。「仕事とはいえ、どこの国でも外交官は大変だな」と教えられた瞬間でもあった。

「定年まで那覇で」

彼が最も楽し気だったのは、2度に亘る那覇勤務時代だった。10年以上前の秋だったか、1回目の勤務時代に那覇分処に顔を出すと、単身赴任の寂しさも手伝ったのか、彼は自宅に私を招待してくれ、手料理を振る舞ってくれた。「東京、そして今度は那覇勤務、家族には迷惑をかけっぱなしですよ」と言いながら、彼の自宅のリビングでお互いの身の上話も含め、話し込んだことを懐かしく思い出す。

2度目の那覇勤務はトップの那覇分処長。その間も3回ほど那覇に足を運んだが、蘇さんはすっかり「那覇の名士」になっていた。もともと沖縄と那覇は

近く、交流も盛んだ。彼は地元紙にもよく台湾・沖縄関係をテーマに寄稿しており、那覇に溶け込んでいた。「このまま定年まで、那覇勤務でいいですよ」と語っていたし、彼を頼って那覇にやってくる引退した外交部の先輩夫婦との夕食会にも同席し、心温まる気持ちにさせられたこともあった。

そんな彼が、なぜ理不尽な死を遂げなければならなかったのか。そこに筆者は大陸との不毛な兩岸関係とネット社会の闇を見る思いである。関空問題で台湾人旅行者に対する大阪分処の扱いを批判した火付け役は大陸の『環球時報』ネット版だったらしい。しかも、中国の駐大阪領事館が大型バスを手配して中国人観光客を優先的に避難させたとのフェイクニュースもネット上に飛び交った。当時、関空は車両立ち入りを禁止していた。つまり完全な虚偽、捏造である。しかし、それが分かった時は、もう遅かった。各方面から集中砲火を浴びた蘇さんは全責任を一人で負って自ら命を絶った。

死んでしまった後、あれやこれや、彼を悼む言葉を政府要人から聞かされても後の祭りである。第2、第3の悲劇を生まないためにも、私たちは浅知恵で安易な非難を抑制することができるのか、ネット情報に翻弄される衝動を抑えることができるのか。台湾と30年余の縁があるだけに筆者は見詰めていきたい。それでも深い悲しみと憤り、蘇さんに対する尊敬と友情の念は生涯変わらない。